

エリス島からエリス島へ

——ペレック・ユダヤ・日本——

菅野賢治

パリで、エリス島の映画を撮りに行くというと、ほとんどの人がそれは一体何のことか、と問い返してきた。ニューヨークでは、ほとんどの人に、なぜ、と聞かれた。なぜエリス島の映画なのか、という意味ではなく、なぜわれわれが撮るのか、という意味だ。それが、われわれ、ロベール・ポペール、ジョルジュ・ペレックと一体どんな関係があるのか、という意味なのだ。

(ジョルジュ・ペレック、『エリス島の物語』、前書き)

何かを伝え、描き出し、復元するのではなく、それが自分にどう関係し、また関係し得るかを執拗に問い返す作家の手記、映画監督の映像。今、その手記を読み、映像を目にするわれわれは、その「何か」との完全な無関係を決め込むこともできるし、逆に完全な血縁関係に入ることもできる。なにも主語を曖昧にする必要はない。ここでわたしは「われわれ」という言葉をもって、はっきりと二十世紀末、日本という極東の島国の住人を指している。

ジョルジュ・ペレックの文、ロベール・ポペールの写真によるアルバム『エリス島の物語——漂泊と希望の物語』(1980年)⁽¹⁾の一つの読み方として、以下にわたしは故意に遠回しな、「円周的」な手法を試みたい。唐突ながら、古い日本の地方紙の記事と、それに添えられた一枚の不鮮明な写真を掲げることから始めようと思う。

戦禍を逃れ、欧州からはるばると海外へ渡航するユダヤ系外人の難民部隊は昨年来続々と来朝し、欧亜連絡船天草丸の入港日には之等の難民で敦賀埠頭や敦賀駅頭は文字通りに国際風景を描出してゐる。十三日入港した天草丸からはき出された難民は三百九十名で、昨年□から始め□記録破りの大部隊の来朝だった〔二字判読不

能]。彼等は欧州を閉め出されて安住の地をアメリカやカナダに求めやうとするもので、シベリヤ經由浦汐から敦賀へ、更に神戸、横浜から目的地へと逃避して行くのである。身のまはり品一切切詰め込んだ大小トランク、家財一を携へて異国への旅を続けてゐるが、その中には無一文で着のみ着のまゝといふ旅行者もあつて、ユダヤ人協会の救ひの手にすがつてゐるこれ等の難民はまだ三十万人も欧州方面にうようよしてゐると伝えられてゐるが、海外逃避の道は唯一つシベリヤ鉄道によつて浦汐經由敦賀に上陸する経路があるのみであるから、今後は欧亚連絡船天草丸、河南丸で敦賀にたどり着く難民は毎航急増する一方だと見られてゐる。これ等難民に対しては敦賀税関支署、警察署、憲兵分隊が防諜取締に万全を期し警戒を密にしてゐる [⋯]。(『難民部隊 続々敦賀に上陸 欧州の戦禍を逃れて』、『福井新聞』、昭和16 (1941) 年2月15日、2頁)⁽²⁾

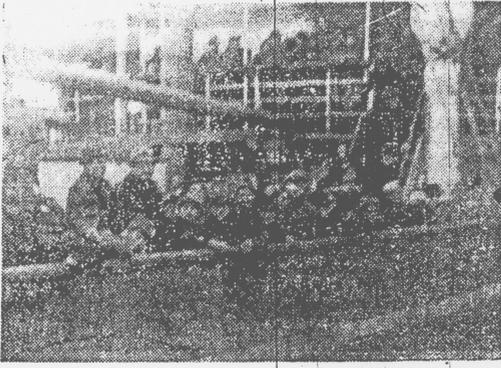
(日曜土)
日五十月二年六十和昭
可認物便郵種三第
(二)

難民は海航に増する一方となり、これあるが輸送に當る連絡船も海軍艦隊に多大な犠牲を極めて、一月廿日以後に区内の難民は難民を逃れて

難民部隊

續々敦賀に上陸

難民は海航に増する一方となり、これあるが輸送に當る連絡船も海軍艦隊に多大な犠牲を極めて、一月廿日以後に区内の難民は難民を逃れて



難民は海航に増する一方となり、これあるが輸送に當る連絡船も海軍艦隊に多大な犠牲を極めて、一月廿日以後に区内の難民は難民を逃れて

船員

難民は海航に増する一方となり、これあるが輸送に當る連絡船も海軍艦隊に多大な犠牲を極めて、一月廿日以後に区内の難民は難民を逃れて

この島は、ニューヨーク、マンハッタンの南端、「自由の女神」に隣接して浮かび、かつて「アメリカの過酷な玄関口」と恐れられ、「涙の島」との異名をとったエリス島ではなく、極東の島国、日本である。この船は、ベレックが『エリス島の物語』のなかで詳述しているように、十九世紀末から二十世紀はじめにかけて千六百万人もの移民を旧大陸から新大陸に運んだ大西洋横断定期船ではなく、「欧亜連絡船」という華々しい名称のもと、ウラジオストックと敦賀を週一便で結んでいた天草丸である。

1940年7月から翌1941年8月までの約十四ヶ月間、五千人以上⁽³⁾のユダヤ人が日本に渡来した。彼らは、リトアニアからモスクワへ、そしてシベリア鉄道という、数週間におよぶ旅路の末、ウラジオストックで天草丸もしくは河南丸に乗船、海が時化なければ船中一泊で日本海を渡り、福井県の敦賀港に上陸した。

この十四ヶ月という期間には、相応の時差をもって、第二次世界大戦史の重要な四つの出来事が呼応している。独ソ不可侵条約（1939年8月）、独軍ポーランド侵攻（同9月）、ソ連によるバルト三国併合（1940年7月）、ヒトラーによる独ソ不可侵条約の破棄（1941年6月）である。この間、リトアニア経由でソ連領に入り、モスクワからシベリア鉄道に乗って日本海へ抜けるというルートが、ヨーロッパを離れる決意を固めた難民に唯一残された脱出口となっていた。

はじめの頃、難民の大半はドイツ系ユダヤ人であった。比較的裕福であり、正規の査証を所持していた彼らは、日本での短い滞在を経て、当初からの目的地であった上海、アメリカ、カナダ、アルゼンチン、パレスチナへとふたたび旅立っていった。後半、1941年2月頃（上に引用した『福井新聞』の記事が書かれた頃）から、ポーランド系ユダヤ人の姿が目立ち始める。身なりも貧しく、正規の査証を所持していないことも多く、『福井新聞』が報じているように「着の身着のまゝ」という人々がほとんどであった。

この歴史的概説の典拠としてわたしが参照しているのは、イスラエルの歴史家、政治家、ゾラフ・バルハフティクが1984年にエルサレムで出版した『難民と生存者』（原題）である⁽⁴⁾。バルハフティク自身、日本を通過したポーランド・ユダヤ難民の一人であった。彼は、1939年、ドイツ軍の侵攻直後に家族とともにワルシャワを離れ、リトアニアに逃れた（数日の差をもって、それが幸運な決断となった）。カウナスの日本領事代理杉原千畝のもとで日本通過査証を取得し、シベ

リア鉄道に乗ってウラジオストックへ、天草丸で日本海を渡り、1940年10月、敦賀に上陸した。横浜に仮の住まいを定め、神戸に頻繁に足を運びながら、バルハフティクは、みずからのアメリカ出発を延期してまで同胞の救出活動に専念する。当時、神戸、横浜の二都市には、日露戦争以来のロシア系ユダヤ移住民の共同体が存在し、「同宗」の新しい難民たちに対する援助活動が組織されていた。バルハフティクは、そうした在日ユダヤ共同体の協力を仰ぎながら、リトアニアに残っているユダヤ難民のなかからできるだけ多くの人々が日本通過査証を手にしてシベリア鉄道に乗ることができるよう、遠隔地から可能な限りの手を尽くしたのである。

すべてこうした事実は、近年、杉原千畝の人となりと業績が歴史の闇から引き出され、バルハフティクの著書が日本語に訳され、中日新聞社社会部の取材班が世界中に散った「生き証人」たちの証言を収集するまで、一般には知られることがなかった⁽⁵⁾。もちろん、知っている者は、第二次世界大戦終結以来、知っていたわけである。敦賀に上陸したユダヤ人の一群を、たとえば二十歳の頃に目撃した人は、現在、まだ八十歳である。目撃者がいないわけではない⁽⁶⁾。しかし、敦賀港のユダヤ人について、これまで日本語の書物は一冊も書かれなかった。日欧交流史、外国人居留地に関する歴史書のたぐいにも、彼らに関する言及は一行も見あたらない。こうして、日本人は、敦賀港のユダヤ人がたどった運命を知るよりも先に、日本という国がほんの短い期間とはいえ極東のエリス島であったという事実を、間接的に、「遠回し」に記憶に甦らせるよりも先に、そして、日本がそのこと自体によって二十世紀ユダヤ・エクソダスの巨大な歴史のなかに確たる場所を占めていたという事実を認識するよりも先に、1980年、ジョルジュ・ベレック、ロベール・ポベールの美しい『エリス島の物語』を手にしてしまったのである。

今日、日本には、もっぱら原子力発電の文脈で名を馳せてしまったこの敦賀湾にカメラを据えるロベール・ポベールがいない。今もって日本文学には、この「非＝場所」に赴き、一冊の『敦賀港の物語』を書くジョルジュ・ベレックが不在のままである。



入港する「天草丸」——敦賀市教育史編さん室所蔵

たしかに、敦賀港とエリス島との性急な比較は危険だろう。

千六百万人以上の
男、女、子供が
エリス島を通過していった
その四分の三以上は
一八九二年と一九一四年のあいだである

その時期
到着する人々の数は
多い時で一日に一万人に達した⁽⁷⁾

他方、敦賀に到着したユダヤ難民の数は五千から六千、その期間も一年二ヶ月に限られている⁽⁸⁾。流入が最高潮に達した時でも、週に四百人が限度であった。まずは、数の次元で比較の手段が奪われているようにみえる。

また、のちの空襲により港湾関係資料が完全に焼失してしまったため確認することはもはや不可能であるが、この時期、敦賀港に上陸した五千から六千人の難民たちのほぼ全員がナチス・ドイツとその占領地域からのユダヤ人であったと推察されるのに対し、エリス島はユダヤ難民だけの通過点ではなかった。

脱出し、異文化にかこまれて生き延びるという運命を常に余儀なくされてきた土地なき民、ユダヤ人が、ここでも、自分たちにとって何が賭されているかという点について、他の人々より敏感だったということはある
しかし、エリス島はユダヤ人専用の場所ではなかった
この場所は、不寛容と悲惨によって、生まれ育った土地から追い払われた、そして今なお追い払われ続けている人々全員に帰属する場所である⁽⁹⁾

さらに、入国管理の厳重さ。エリス島では、

運命は

アルファベットの顔をしていた。衛生局の係員が
到着者たちを大急ぎで検診し、そして
怪しいと思った人々の肩に
チョークで文字を書き記していくのであった。その文字は
係員が見立てた疾病や不具を表していた

- C は肺病
- E は眼
- F は顔
- H は心臓
- K はヘルニア
- L は跛行
- SC は頭皮
- TC はトラコーマ
- X は精神薄弱⁽¹⁰⁾

ルイ＝フェルディナン・セリーヌが『夜の果ての旅』(1932年)のなかで、主人公バルダミュに「ポーランドの蚤、ユーゴスラビアの蚤……スペインの蚤、クリミアの毛虱、ペルーの疥癬といったぐあいに」移民の体から寄生虫を採集、

分類して「箱づめ」にする作業をさせているのも、たしかにこの場所である⁽¹¹⁾。

こうして、移民全体の二パーセントにあたる約二十五万人（ロベール・ボベールの曾祖父を含む）が、健康状態、その他の理由で、エリス島からヨーロッパへ送り返された。1892年から1924年までのあいだに、島では、少なく見積って三千人の自殺者が出た、とペレックは報告している⁽¹²⁾。

他方、敦賀港の税関では、旅券、査証の提示や所持金の申告といった所定の手続きを除き、健康診断、その他の手段による「選別」が猛威をふるった形跡はない。検査官が到着者の肩に白墨でひらがなを記していった、などという事実も報告されていない。大雪や時化のため船の入港が遅れ、翌朝まで船内待機を強いられることはあっても、入国審査自体はエリス島のそれに比して、はるかに緩やかなものであったと想像される⁽¹³⁾。



『朝日新聞』（大阪版）、昭和16（1941）年6月6日

『朝日新聞』大阪版は、「世界の敦賀 ジブシーの唄」と題し、1941年6月4日の河南丸入港の様子を伝えている。

船ではボート・デツキにモスクワからサンフランシスコへゆく駐ソ英参事官夫人らははなやかな姿、下の甲板にはよごれ風呂敷のやうな洋服を着たユダヤの流民が顔を見せてゐる。検疫が終わつて船は棧橋に近づく。サロンでは提示金の不足、旅券の不備などで係官が汗まみれになつて訊問を続けてゐる。[···] 旅具検査が始まる。流民はせいぜい二、三個のトランク、それも開いて見るとガラあきで、牛乳の空壺が転がり、パンと古靴が同居してゐるだけ。黒服の背の高い男はマンドリン一つを抱へてポヤツと立つてゐる。『ユダヤ人もいよいよ落ち目の方だな』、検査官があきれてゐる。船の中ではお金に困つて売店の果物さへ買はず、船員に万年筆を買つてくれなどとせがむ。[···] かつてある船でユダヤ人が多すぎ、一度に食堂に収まらぬので、一般外人とユダヤ人と二回に分けたところ、各国外交官の多数交る一般外人側では、非常な歓待として、食卓で一人々々が立ち上り、船長に謝辞を述べたほどで [あつた]。⁽¹⁴⁾

受け入れ側、日本の世論も、まさに困惑の表情を隠しきれない。

新欧開出しのユダヤ人 続々わが国に流入 敦賀へ毎航海に三百乃至四百シベリア経由で安住の地、南北米の新天地を求めて来朝するユダヤ系避難民の数は、浦汐一敦賀間欧亜連絡船天草丸で毎航海四百乃至三百名の大部隊が敦賀に上陸してゐるが、これらの中にはその目的地さへ判然としてゐないものがあり、はなはだしきは目的地がイラン行、蘭印行、米国行などの査証をいくとほりにも所持してゐるものがあり、あるひは又日本永住の希望を有してゐるものもあるなど、日本上陸が彼等の最終目的の如き観を呈してゐる。彼等の多くはカウナス日本領事館の査証とポーランド旧政府の難民証明書とをもつてをり、中にはロンドンに数万ポンドの銀行預金を有してゐると称する者もあるかと思へば、パンすら求める無一文のものもあり。目的地行の便船に乗りきれないものが神戸に多数滞在の有様で、今後シベリア経由で渡来する彼等難民の数は推定約三十万人といはれてをり、毎月約千余名の者が来朝してゐるわけであるが、米国アルゼンチン国等の物資が危険なる航海のもととはいひながら船舶によつて欧露の港湾に出入してゐるのは遙々陸路シベリアによつて来るといふ現象を示してゐるのは [原文ママ]、その裏側にあるひは国際的關係が多分に含まれてゐるとは勿論である。日本の人道的立場よりする彼ら難民への便益供与も、彼らの数が余りに多いのと、目下難民の渡来数と出港数は一致しないため、神戸に溢れてゐる彼らの移住先については当局も腐心してゐる始末であるが、最近の米国当局の探りつつある難民入国拒絶主義により日本に立往生してゐる

彼らは、このままで行けば内地はユダヤ人の氾濫を見る恐れがあり〔原文ママ〕、厄介な問題を提供してゐる。⁽¹⁵⁾

敦賀港に上陸を果たした難民たちは、ほとんどの場合、神戸のユダヤ人団体のメンバーに出迎えられていたようだ。ふたたび『福井新聞』から――

難民部隊 三百五十名上陸許可

欧州の戦禍より逃れた避難民全部三百五十名は、十三日夜から十四日朝まで欧亜連絡船天草丸の船内で過して、明日入国手続きをした。十四日午前十時全部の上陸を許可されたので、ユダヤ系外人は十四日中に上陸し、コーデルマン氏に引率され午後零時二十七分敦賀駅発車列車で神戸にむかつた。⁽¹⁶⁾

天草丸 予定を遅れて入港

欧亜連絡船天草丸は、浦汐から船客三百五十〇名〔一字判読不能〕をのせて予定よりおくれて十三日夜〇時〔一字判読不能〕敦賀に入港、十四日朝八時から検疫を開始した〔…〕。欧州の戦禍をのがれてゐるユダヤ系十七ヶ国人三百六十一名が来敦したが、この内、南北米に赴くラビ教徒八十名も居り、見せ金も査証不備の者多数あるため当局をなやましてゐるが、上陸は同日午後許可された。⁽¹⁷⁾

もちろん、査証不備、その他の理由でウラジオストックへ送還されてしまう事例もあった。

内外の船客も賑かに 天草丸きのふ船出 ユダヤ人二名が同船で送還さる

〔…〕ユダヤ系ポーランド人二名が、査証なかつたため、神戸ユダヤ人協会から二十円づつを恵まれて送還された。⁽¹⁸⁾

船中に涙の場面 天草丸で送還されたユダヤ人

欧亜連絡船天草丸は、内外船客七十九名を乗せて、十六日午後二時敦賀出帆浦汐に直行した〔…〕。十三日、欧州の戦禍を避けて流浪の旅をつづけてゐるユダヤ人七十四名が査証不備の点と所持金不足のため浦汐に向け送還されたが、彼等のうち〇六名〔一字判読不能〕も交はつてをり、送還と決るや、泣きの涙で船中はしばし悲劇の場面を見せた。⁽¹⁹⁾

エリス島で二十五万回繰り返された悲劇である。

ところが、一週間後の便で彼らはふたたび敦賀に逆送されてくる。

ユダヤ人また逆送 天草丸で敦賀上陸

欧亜連絡船天草丸は二十三日午前九時、敦賀に入港した。[……] 欧州の戦禍を逃れて流浪の旅を続けるユダヤ人部隊が百九十七名であったが、去る十六日浦汐に送還されたユダヤ人七十四名もまじつて再び同船で戻ってきたが、この一行は同日午後上陸を許された。⁽²⁰⁾

ウラジオストックでの再上陸も拒まれた末、在日ユダヤ人団体の働きかけによって、査証、所持金などの条件が敦賀で整えられたのである⁽²¹⁾。

埠頭に位置する敦賀港駅から敦賀駅までは、直線距離にして二キロ、線路づたいで三キロ弱の道のりである。懐に余裕のある難民たちは敦賀港駅からそのまま汽車で敦賀駅に移動し、北陸本線を米原方面に乗り継ぐ。余裕のない人々は、支線の運賃を惜しみ、港から敦賀駅までの道のりをとぼとぼと歩く。敦賀の一般市民は、物珍しさと怖さのうちにも、同情の念をもってこれら難民たちに接していた。

長い入国審査を終えてやっと船を降りたツビたちは、すぐそばの鉄道駅に向かった。十六、七歳の日本人の少年が近づいて来た。リンゴやミカンなど果物がいっぱい入ったかごを抱えている。それを差し出し、しぐさで「どうぞ」と促した。代金を払おうとすると、しっかりした顔つきの少年は「ノー」と拒んだ。

果物をだれも取ろうとしないので、少年は一瞬困った表情を見せ、足元にかごを置いて走り去った。⁽²²⁾

当時十四歳だった井上脩氏は、「怖くてそばまで近寄れない」一方、「わざわざ見にでかけるのも気が引ける」という思いを抱いていた、と回想する。たしかに周囲には、「難民に果物を分けてやりに行ってきた」と語る人々もいたという。汽車通学の待ち時間に敦賀駅で、何度か十五、六名のユダヤ難民集団を目にした阪上弥氏は、「よく、ユダヤ人は世界を股に掛けて強い団結力を発揮しているときいていたので、ちょっと怖いという気もした」と振り返る。同じく、敦賀駅でたびたび難民たちの姿を目にしていた長谷雅晴氏は、「子供だったので、日独関係はよくわからなかったが、友好国であるはずのドイツを逃れてなぜ日本に来るのだろう、と少し不思議に思った。大人に聞いてみると、どうやら日本を通過し

てどこかへ行く、ということだった」と語る⁽²³⁾。

上陸許可が夜になって米原方面の列車に間に合わず、敦賀で一夜を明かさねばならない場合もあった。ここでもすべては懐次第である。余裕のある人々は、シベリア出兵時代、白系ロシア人の定宿として大いに栄えたこともある四十年來の老舗「熊谷ホテル」に部屋をとる。余裕のない人々は、おそらくユダヤ団体の案内役の指示に従い、市内の繁華街に誘導される。「着飾った女がたくさんいた。男たちも出入りしていた。遊郭だったのだ。畳の部屋には、火鉢が一つあるだけだった。でも、ぜいたくは言えなかった。」⁽²⁴⁾ 当時、花街は、敦賀港駅にほど近い天満宮の周辺に広がっていた。

敦賀駅の職員たちも、いささか高圧的ながら最低限の親切心は忘れなかった。

ユダヤ人の氾濫で 敦賀駅案内が困惑 警戒すべき内地への移動情勢

敦賀駅案内所では、欧亜連絡船天草丸入港毎に欧州の戦禍を避けて横浜あるひは神戸を經由し安住の地南北米の新天地を求めて赴く亡命ユダヤ人四百名乃至三百名の大部隊が、上陸駅待合室に身動きならぬ混雑を呈し、声をからして叫んでゐる。一列励行も彼らには何等の反応もなく、さながら洪水の如き有様なので、同駅案内所主任後藤書記は、彼等にも旅行道徳観念を大いに植つけてやらうと案内掛を出動し大童で整理にあたつてゐるが、最近では案内所の窓を叩き“道しるべ”を乞ふ彼等が殺到し、応答にもソウトウの時間を要すので、兎も角英文で敦賀発米原乗換へ発着、横浜神戸着時間等を窓口に掲げて親切な案内に当つてゐるが、防衛に関連するやうな質問には十二分の注意を払ふ一方、彼等の行動に対しては万全の警戒を行つてゐる。⁽²⁵⁾

状況は、まさに危急の観を呈している。カタストロフィックとさえいえるだろう。敦賀上陸と同時に「案内所の窓を叩き“道しるべ”を乞ふ」彼らは、ペレック、ボバールの『エリス島の物語』に散りばめられた白黒写真に写し出された移民たちと、おそらくまったく同じ表情、同じ眼差しをしていたにちがいない。

エリス島の心理的位置づけについて、ペレックは、

それはまだアメリカではなかった
単なる船の延長
古きヨーロッパの残骸にすぎなかった⁽²⁶⁾

と記している。同じように、敦賀の難民たちにとって、日本はまだアメリカでも、上海でも、パレスチナでもなかった。その先、見知らぬ神戸あるいは横浜での不確かな生活が待っており、さらにその先には、最終目的地に向けて長い長い海上の旅がひかえていた。

しかし、同じ頃、ヨーロッパでは、すでにアウシュヴィッツの煙突から煙が立ち上り、ユダヤ人たちが、駅の窓口ではなく絶滅収容所の降車場に、案内を乞うためではなく、メンゲレ博士の自称「健康診断」を受けるために「一列励行」していたという事実を思えば、敦賀の状況は、牧歌的で、安堵感に満ちた、喜劇的なものにさえ感じられてくる。同じ頃、あるいはやや遅れて、フランスの地からは、度重なる一斉検挙の末、ペレックの母シルラを含む不特定多数のユダヤ人たちが運び去られていたという事実を考え合わせるならば、敦賀駅のユダヤ人たちがおかれた状況には、まだ微笑の余地さえ残されている。「大人たちはさすがに憔悴しきった様子だったが、その表情にはどことなく安堵感も読みとることができた。とりわけ子どもたちは、敦賀へ上陸してやっと親の手を離してもらえたのだろう、いかにも嬉しそうに歩いていた。」(井上脩氏)「敦賀駅はもともと英語表記も併用しているから大丈夫だろうと、当時の敦賀駅の国際性に少し鼻が高かった。」(阪上弥氏)「ある難民のトランクの蓋に丸い穴が開けてあり、内側から網が張ってあった。何かと思って見ると、猫らしき動物がうごめいていた。友人らと数人で、『これはキヤットか』と聞いてみようと思ったが、『キヤット』と言って通じるかどうか、心許なかったのでやめた。西洋の人は、こんな大変な旅にも飼い猫を連れていくのだなあ、と強く印象に残った。」(長谷雅晴氏)⁽²⁷⁾

ジョルジュ・ペレックの『エリス島の物語』を読むという口実のもと、わたしは、すでに長々と敦賀のユダヤ人のことを語ってしまった。そこから遠い距離をおいてペレックのエリス島に接岸を試みる前に、なお、戦前、戦中の日本におけるユダヤ観について簡単に触れておきたい。

かつて日本に反ユダヤ主義が存在し、そして今なお存在し続けている、と耳にして驚く者も今では少なからう。日本における反ユダヤ主義については、宮澤正典氏による緻密な文献研究があり、最近も、松浦寛氏による「ユダヤ陰謀」神話の起源と生成に関する書物や、デイヴィッド・グッドマン、宮澤正典の共著による「日本反ユダヤ文化史」とも呼ぶべき好著が刊行されたばかりだ⁽²⁸⁾。

日本とは、実に奇妙な国である。明治以来、ヨーロッパ産反ユダヤ主義の想像界を丸ごと、忠実に輸入し続けながら、一度も反ユダヤの直接行動を経験したことがない。理論的に反ユダヤ、実践的に親ユダヤの国、それがいわば日本である。フランスにおけるドレフュス事件が『ドレフュス抜き事件』（マルセル・トマによる事件史研究の題名）であったとするならば、日本の反ユダヤ主義は「ユダヤ抜き反ユダヤ主義」である。

「ユダヤ抜き」というのは、必ずしも正確な表現ではないかもしれない。十九世紀以来、多くのユダヤ人商人が日本に渡来、滞在していたし（長崎に彼らの墓碑が残されている）、二十世紀に入ると、先に述べたように、ロシア系ユダヤ人の小さな共同体が神戸と横浜に形成され、それが1940年、新たなドイツ系、ポーランド系ユダヤ難民の受け入れ口ともなった。しかし市井の日本人は、今も昔もほぼ変わりなく、ユダヤ人をほかの「外人」から区別せず、また、なぜ区別しなければならないのか、その理由さえわからない。かくして、バルハフティクをはじめ、1940～41年の日本に滞在したユダヤ人は、日本人から反ユダヤ感情を示されたことは一度もなく、逆に、深い憐憫の情をもって迎えられたことを強調している。

敦賀に到着した難民は、ほとんどが神戸に移され、そこで同胞だけでなく日本人からも深い憐れみの心をもって迎えられた。難民のなかには相当数のラビと神学生が含まれており、もみあげを長く垂らしあごひげをのばしたユダヤ人は、日本人にはめずらしい姿であった。生活様式やウィークデーと安息日の信仰生活は、もちろん違っている。しかしそれでも日本人の間にはわれわれに対する同情の念がみられた。

(29)

かくして、神戸の少年時代を描く、妹尾河童『少年H』の主人公は、神戸の非ユダヤ系ドイツ人が、なぜユダヤ人を憎むのか、その理由が呑み込めない。

Hは、ごく単純な動機からだったが、“ドイツ人は嫌いだ”と思うようになっていた。クラウセンさんというドイツ海軍士官の家に行ったとき嫌な思いをしたからだ。父親が洋服の仮縫いをしているのを待っている間、一つ歳上のクラウセン家の長男とコリントゲームで遊んでいた。そのとき、Hが三回つづけて勝ったのが気に入らなかったのか、急に怒りだした息子が、日本語で「ニホン人もユダヤ人もみんなバ

カ！」と、ゲーム盤をひっくり返した。⁽³⁰⁾

今回、敦賀のユダヤ難民に関する資料収集をつうじて（それはまだごく限られた調査ではあるけれども）、当時の市井人の反応に反ユダヤ的感情の痕跡はまったく見あたらなかった。少なくとも、敦賀駅案内所主任後藤書記が反ユダヤ主義者でなかったことは確かである。

ところが、理論の次元において、二十世紀初頭、あるいはそれ以前に遡る日本の反ユダヤ主義は、戦前、戦中、まさに猖獗をきわめていた。宮澤正典氏の『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録——1877～1988』を繙いただけで、そのことは十分に窺い知ることができる。1924年、『世界革命之裏面』として全訳が完成した『シオン賢人の議定書』は、その後、随所に繰り返し抜粋され、注釈・解説の対象となっていた。ヒトラー著『我が闘争』は1937年に邦訳され、並み居るドイツ反ユダヤ主義理論家の翻訳書とともに着実に版を重ねていた。ソビエト共産主義の脅威、アメリカ資本主義の脅威、その他、日本にとって災厄の種となり得るすべての要素が国際ユダヤ組織の企む「陰謀」にはかならない、として見事に論断されていた。

そうした日本反ユダヤ主義理論家の一人、安江仙弘は、包荒子の筆名で上記『シオン賢人の議定書』や、ヘンリー・フォード『世界の猶太人網』⁽³¹⁾の訳者としても知られている。彼は『世界革命之裏面』のなかで、アメリカ、エリス島のユダヤ難民について次のような一節を書き記していた。

勿論米国には猶太の革命家等の入国は之を阻止する幾多の障碍が設けられてあるが、他の一方には之を無効にする完全な組織が出来て居るので各種の猶太人がドシドシ入国して来る。従つて伊・露・独・派等の革命家が皆猶太人である如く、現在米国の過激派の首領も I・W・W の首領も亦此の猶太人である。時に猶太革命家がエリス島で米国官憲の抑留に遇ふこともあるが、猶太人は忽ち米国の国会議員、新聞記者、および州官憲に打電して、某氏の為に運動すべきを伝へ、此等の人々は米国政府に打電して某氏の人格を保証し入国許可の段取りとなるのが通例である。而も猶太移民に就て世上に宣伝さるるところは他国にて圧迫された窮乏せる婦女子の写真である。米国官憲の中の具眼者が猶太人の侵入の恐るべきに気の付いた時には既に遅く、猶太勢力が強大となつて公然之を攻撃することすら不可能となつた。⁽³²⁾

とすれば、ペレック、ボベールのアルバム『エリス島の物語』に多数収録された写真も、すべて、ユダヤ侵略の危険から世論の眼をそらすための迷彩にすぎなかった、ということになる。

日本人における想像界の反ユダヤ主義と実践界の親ユダヤ主義、その奇妙な対照はまさに注目に値しよう。日本反ユダヤ主義の理論家が、アメリカのエリス島を例証としてユダヤ侵入の危機を政府と世論に訴えかけているあいだ、日本には、現実に五千人から六千人のユダヤ難民が押し寄せていた。日本反ユダヤ主義が活字として猖獗をきわめる一方、五千ないし六千人のユダヤ人が、住民側からの反ユダヤ感情に一度もさらされることなく日本を通過していった。つまり、当時の日本人は、「想像のユダヤ人」のなかにもありとあらゆる危険の種を見だしながら、生きて動く「現実のユダヤ人」を見なかった、あるいは見ていながら、ほとんど問題にしなかった。そして、憐れみを抱く時には、外つ国からの避難民という境遇に、それがユダヤ人であるか否かにかかわらず、一様に憐れみを抱いていた。その時、日本は、みずからそうとは認識しないまま、たしかに一個のエリス島であった。

われわれは、かくも奇妙な、この「もう一つのエリス島」からこそ船を出して、ジョルジュ・ペレックのエリス島にたどり着くべきなのではないだろうか。

試みに、時間を逆行し、行程を遡ってみる。1941年2月、雪の敦賀港から天草丸で日本海を渡る。ウラジオストックから、その五千人のユダヤ人とは逆方向にシベリア鉄道を走らせる。モスクワから、リトアニアの日本領事館に向かい、杉原千畝に一言敬意を表する。そこからナチ占領下のポーランドに戻り、ペレックの両親が生きた戦前のポーランドに思いを馳せる。

そこから、さらに過去へ、西へと進路をとる。ワルシャワでパリ行きの夜行列車に乗り、1930年代のパリに到着する。ベルヴィル地区のペレック家を訪ねる。そこで、ジョルジュ少年とともに、イディッシュ語新聞の上、かくも有名な、あの未確認のヘブライ文字に眼を凝らす⁽³³⁾。そして、そこから四十年の歳月を一気に下り、作家ペレック、映画監督ボベールとともに、ニューヨーク、エリス島へ……。

エリス島からエリス島へ、われわれは、こうした潜在性としての長旅を果たすことができる。なにをためらうことがあろう。ペレックのエリス島への旅自体、

潜在的な時間の旅にほかならなかったのだから。『エリス島の物語』は、ルポルタージュ、歴史探訪の外見とも裏腹に、遠回しな、潜在的な記憶探索の試みにほかならず、また、まさに記憶が遠回しで潜在的である、その形態そのものに関する一つの実験であったのだから。

時間と空間において、われわれからかくも隔たったこの場所は、われわれにとって、潜在的な記憶、あり得べき自伝の一部をなしている

たまたま、われわれの父母、祖父母がここを通過したかもしれない

彼らがポーランドに留まるか、留まらないか

あるいは途中、ドイツ、オーストリア、イギリス、フランスで足を止めるかどうかは

ほとんど場合、偶然のなせる業であったから⁽³⁴⁾

ジョルジュ・ペレック『エリス島の物語』を、遠回しに、「円周的」に読み直しながら、問題となるのは年号と旅程の潜在性である。そもそも、記憶の探索は条件法過去で動詞を操る以外にない。もしもペレックの両親が、ペレック自身がエリス島で立てた仮定節にもとづいて、1924年、移民に対してアメリカの門戸が事実上閉ざされる以前にヨーロッパをあとにしていたとしたら、彼らはおそらくエリス島を通過したであろう。ペレックはアメリカ人として生まれていたであろう。しかし、年表と世界地図の向きを逆にして、別の仮定節を立てることも可能だ。もしもペレックの両親がフランスに移住せず、1930年代のポーランドに留まり、そして、時期として遅すぎないうちに（つまり独ソ不可侵条約の破棄により国境が封鎖される前に）、モスクワからシベリア鉄道に乗ることを考えたとしたら……。主節を補う必要はないだろう。

敦賀埠頭に舞い戻るジョルジュ・ペレック、決して考えられないことではない。『W』の舞台がパリのベルヴィルでなく、神戸の北野町であってどうしていけないのか。フランス語による『エリス島の物語』のかわりに、日本語の『敦賀港の物語』であってどうしていけないのか。「日本人ジョルジュ・ペレック」であって、なぜいけないのか。



昭和初期の敦賀埠頭——敦賀市教育史編さん室所蔵

結論と呼ぶには、あまりに潜在的にすぎよう。しかし、ペレックがエリス島とのあいだに取り結んでいた関係は、われわれが、あの日本海沿岸の、穏やかな、かくも平凡な港町とのあいだに取り結んでいない関係、取り結ぶことを忘れてしまっていた関係、しかし、その気になりさえすればすぐにでも取り結ぶことのできる関係と、実のところ、さほど性質を異にしているとは思えないのである。

今日、人がエリス島を訪れるのは、決して偶然の思いつきなどではないと思う。かつて島を通過した人々は、二度とそこに舞い戻ろうとはしなかった。その子供たち、あるいは孫たちが、彼らにかわって、今、そこへ舞い戻る。なにかの痕跡を求めてそこへやって来る。つまり、ある人々にとって苦難と不安の場所だったものが、他の人々にとっては、彼らに関する記憶の場所となったのだ。彼らを歴史に結びつける絆が節目をなす場所の一つになったのだ。

どう描き出せばいいのか？

どう語ったらいいのか？

どう見つめたらいいのか？

(…)

どうやったら向こう側に行けるのか？

後ろへ回れるのか？

見てください、と差し出されたものにとどまらず

見ることになるだろうと、あらかじめわかっていたものだけを見るのではなしに？

示されていないもの、写真に収められなかったもの、古文書として、復元され、演出されていないものを、どうつかんだらいいのか？ (『エリス島の物語』)⁽³⁵⁾

* 本稿は、1999年12月14日、東京日仏学院で行われた「ペレックとユダヤ性」をめぐる座談会（発言者：パリ第7大学教授マルセル・ベナブー氏、甲南女子大学教授酒詰治男氏、中央大学助教授ミカエル・フェリエ氏、ならびに筆者）における発表原稿の日本語訳に、敦賀市教育史編さん室、井上脩氏、ならびに敦賀市在住、阪上弥、長谷雅晴両氏へのインタビューを加えて、全体を大幅に書き改めたものである。

註

- (1) Georges Perec, Robert Bober, *Récits d'Ellis Island, histoires d'errance et d'espoir*, Ed. du Sorbier, 1980. エリス島に関する史的記述としては以下の英語文献を参照することができる。Edward Corsi, *In the shadow of liberty : the chronicler of Ellis Island*, New York, Macmillan, 1935 ; Mark Helprin, *Ellis Island & other stories*, San Diego, Harcourt Brace, 1981 ; August C. Bolino, *The Ellis Island source book*, 2nd ed, Washington, D.C., Kensington Historical Press, 1990 ; Avraham Barkai, *Branching out : German-Jewish immigration to the United States, 1820-1914*, New York, Holmes & Meier, 1994
- (2) 『福井新聞』の記事の検索と複写にご協力くださった敦賀市立図書館に深くお礼申し上げます。以下、『福井新聞』『朝日新聞』からの引用に際しては、旧仮名遣いを保存しながら漢字の新字体を用い、若干の脱字と句読点を補うこととする。
- (3) バルハフティク（後出）による推定値。井上脩『敦賀港の変遷（終戦まで）——

- 敦賀港の歴史探訪』（国鉄つるがみなと会、1983年、66頁）によると、「戦火を避けて多くのユダヤ人を主体とする欧洲難民が、シベリヤ鉄道経由で敦浦間航路へ殺到し、昭和15年10月から翌年4月にかけて当港へ上陸して大部分が米国へ避難した。その内訳をみるに、外交官108名、商社員628名、その他3,165名、合計34カ国から3,901名の人びとが当港へ上陸している。」
- (4) ゾラフ・バルハフティク『ヒトラーの魔手を逃れて日本にきたユダヤ難民』、滝川義人訳、原書房、1992年、おもに第二部「日本経由のパレスチナ移住」を参照。
- (5) バルハフティク、前掲書；杉原幸子『六千人の命のビザ』（朝日ソノラマ、1990年；新版、大正出版、1993年）；中日新聞社会部編『自由への逃走』（東京新聞出版局、1995年）。なお、宮澤正典氏による二つの論考、「日本への避難ユダヤ人と新聞」（『ユダヤ・イスラエル研究』第11号、1988年10月）、「神戸におけるユダヤ難民—1941年4月～9月を中心に—」（『ナマール』創刊号、1996年7月）も大変参考になった。筆者の問い合わせに快くお答えくださった宮澤氏にあらためてお礼申し上げます。
- (6) 敦賀市教育史編さん室、井上脩氏は、その目撃者の一人である。筆者は敦賀市に氏を訪ね、直接話をうかがう機会を得た。ユダヤ難民に関することばかりでなく、当時の敦賀港、欧亜連絡鉄道について、数々の貴重な情報を提供してくださった井上氏に深く感謝申し上げます。井上氏よりご紹介いただいた阪上弥、長谷雅晴両氏からも、後日、電話でお話をうかがうことができた。ご協力に心より感謝申し上げます。
- (7) Georges Perec, *op.cit.*, p.33
- (8) 明治以来、大陸と日本をつなぐ最重要拠点であった敦賀港にヨーロッパ人が渡来すること自体は、さほど珍しいことではなかった。1940～1941年のユダヤ難民以前にも、ロシア革命時の白系ロシア人移民の到来、シベリア出兵時のポーランド人孤児受け入れという、少なくとも二度、ヨーロッパ人の大量上陸を敦賀港は経験している（前掲書『敦賀港の変遷』、38頁）。
- (9) Georges Perec, *op.cit.*, p.63
- (10) *Ibid.*, p.49
- (11) ルイ＝フェルディナン・セリヌ、『夜の果ての旅』、高坂和彦訳、国書刊行会、『セリヌの作品』第一巻、186頁
- (12) Georges Perec, *op.cit.*, p.18
- (13) 敦賀上陸のための入国審査は船上でおこなわれていたものと思われる。井上氏は、税関の係員を乗せたランチが天草丸に横付けされる光景を記憶している。船医による健康診断も、やはり上陸前、船上で行われていたのではないかと井上氏は推測する。
- (14) 『朝日新聞』（大阪）、朝刊、昭和16年（1941年）6月6日
- (15) 『福井新聞』、昭和16年（1941年）3月8日
- (16) 同、2月15日

- (17) 同、3月15日
- (18) 同、2月28日
- (19) 同、3月18日
- (20) 同、3月25日
- (21) 中日新聞社社会部編、前掲書、61-62頁
- (22) 同、63頁
- (23) 筆者による井上脩氏への直接インタビュー、ならびに阪上弥氏、長谷雅晴氏への電話によるインタビュー
- (24) 中日新聞社社会部編、前掲書、65頁
- (25) 『福井新聞』、昭和16年（1941年）3月8日
- (26) Georges Perec, *op.cit.*, p.49
- (27) 筆者による井上脩氏への直接インタビュー、ならびに阪上弥氏、長谷雅晴氏への電話によるインタビュー
- (28) 宮澤正典、『日本人のユダヤ・イスラエル認識』、昭和堂、1980年；宮澤正典、『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録——1877～1988』、新泉社、1990年；松浦寛、『ユダヤ陰謀説の正体』、ちくま新書、1999年；デイヴィッド・グッドマン、宮澤正典、『ユダヤ人陰謀説』、藤本和子訳、講談社、1999年
- (29) バルハフティク、前掲書、161～162頁
- (30) 妹尾河童、『少年H』、講談社文庫、上巻、213～214頁
- (31) ヘンリー・フォードの反ユダヤ主義について、拙稿「ジャズ・アルコール・戦争——初期セリーヌにおける反ユダヤ主義」、有田英也・富山太佳夫編『セリーヌを読む』、国書刊行会、1998年9月、pp.55-105 を参照されたい。
- (32) 包荒子（安江仙弘）、『世界革命之裏面』、二酉社、大正13年（1924年）、372～373頁
- (33) ジョルジュ・ペレック、『W（ドゥブルヴェ）あるいは子供の頃の思い出』、酒詰治男訳、人文書院、1995年、22頁
- (34) Georges Perec, *Récits d'Ellis Island*, *op.cit.*, p.55
- (35) *Ibid.*, pp.36-37